

---

# 翔ちゃんによろしく

木村よし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

翔ちゃんによろしく

### 【Nコード】

N3828D

### 【作者名】

木村よし

### 【あらすじ】

完結 『それとも、ほんとは襲って欲しかったとか？』 『なっ！』 平凡な奈緒と、チャラ男の翔。全く似合わない二人は、実は幼馴染。擦れちがい、不器用な恋が静かに動き出す…。『行かないでよ、翔ちゃん。』

## 0・（前書き）

はじめまして。木村よしです。

この『翔ちゃんによろしく』が初投稿になりますが、よろしく願います。

また、感想や批評、アドバイスや駄目だしなど、皆様からの書き込みが、よしの生きる力となります笑。

なので、ちよっとしたことでも、よければ書き込んでやってください。お願いします。

0 .

0 .

翔ちゃん。

呼んでみる。返事が返ってこないことくらいわかっているけど。

翔ちゃん。

なんで翔ちゃんみたいななの、好きになっちゃったのかなあ。

今までも、これから、私たちはずっとただの幼馴染。

好きだなんて言わない。

それくらい、わかってるから。

翔ちゃん。

## 1・保健室

### 1・保健室

気分が悪い。朝から、頭がグワングワンする。風邪かな。ちょっとくらい大丈夫だって思って学校来たけど、三時間目が終わるころには本格的に調子が悪くなってきた。ふらりふらりと保健室。

「先生、気分悪いよお」

額を押さえながらガラリと扉を開ける。

「あ」

「あ」

「気分悪いの？大丈夫？」

優しく問いかけてくれる保険室の先生と、もう一人。

少し茶色く染めた髪が、耳に開いた穴をうまく隠している。

「翔ちゃんもいたんだ」

「いちゃ悪いだよ」

中村翔。典型的な軟派男。

私、相模奈緒の幼馴染。

「中村くんも気分悪いみたいなの。最近風邪が流行ってるからね」

P R U R U R U R U P R U R U R U R U

内線電話が鳴る。受話器をとり、適当に相槌をうつ先生。

「中村くんに相模さん、悪いんだけどちょっとここを離れなきゃいけないの。すぐ戻ってこれると思うんだけど、少しの間静かに寝てられるかしら？」

「あ、はい。大丈夫です。」

「ごめんね。じゃあ、ちょっと失礼するわね」

先生が出て行くと、翔ちゃんは何も言わずにベッドの中へ。カーテンを引き、しっかりと境界線をつくる。

私も、その横のベッドの中へ。

カーテンを通して、薄暗いクリーム色の光が布団の上に落ちてくる。少し寝ようと目を閉じる。

「なあ、奈緒。」

「・・・なに？」

カーテン越しの会話。

「お前、彼氏できただろ。」

この人は、いきなり何を言っているんでしょ。

「・・・なんで？」

「一年の菊池。」

「菊池くん？」

菊池忠義くんは、料理部の後輩。

「ん。この前の日曜日、二人で歩いてただろ。」

「ああ、あれね。今度部活で使う材料の下見だよ。」

「ふうん。」

ふうんて。

「なあ、俺さ、実はマジな奴がいるかも。」

「・・・」

「っていったらどうするっ？」



「どうするもなにも、今付き合ってるミホちゃんはどつするのよ」

「あんなのはじめから遊びだし。」

「かわいそ。翔ちゃんみたいなのと付き合つと、絶対泣くね」

「意外と優しいんだぞ、俺。」

「はいはい。」

「試してみる？」

「みません。」

「そーですか。ま、奈緒はもはや女じゃねえしな。」

「・・・」

がばりと体を起こす音と、しゃっというカーテンの音がかんこえてきて、翔ちゃんが出て行くんだなっでわかつた。

「じゃ、俺そろそろ行くわ。」

「ん。じゃあね。」

ドアの開く音がして、また静かになる。  
行っちゃった。行かないでよ。まだ私ここにいるじゃん。

ねえ、本気で好きな子って誰？私の知ってる子？

本当は、いろいろ聞きたいんだよ。

翔ちゃんからそういう話をされる度に、私の心はギュッと痛くなつて、涙が出そうになるんだよ。

翔ちゃん。翔ちゃん。

好きだよ。翔ちゃんが、好きだよ。

でもね、言えない。私は翔ちゃんにとっては女じゃなくて、ただの幼馴染だもん。

苦しいよ。

翔ちゃんが大学生の女の人と付き合いだしたのはそれから一週間後のことで、別れたのはたった三週間後のことだった。

2・おせんべえ

2・おせんべえ

ピンポン。

私の住むマンション。

私の住む階の一つ上の階。

ドアのチャイムを押す。少したって、翔ちゃんのおばちゃんの声がした。

『はい』

「奈緒ですけど」

『あらあ、いらっしやい。ちょっと待ってね』

ブツリとインターホンの音声が途切れる。

がちやりとドアが開くと、そこには翔ちゃんが立っていた。

「よお」

「あ、よお。て、おばちゃんは？」

「なんか俺が出ろって」

これはおばちゃんなりに気を利かせたつもりなのだろう。

「あのね、親戚のおばちゃんが沢山おせんべえ送ってくれたから、おすそわけ。はい」

ずい、と手に持っていた大きな袋を差し出す。中には色々な種類のおせんべえ。

「あー、さんきゅ」

「うん、じゃ、これだけだから」

またね、と言おうとしたとき、中から「あがってもらいなさあい」「っていうおばちゃんの声が聞こえた。

その声に、翔ちゃんは少しだけ恥ずかしそうに頭を掻いた。

「あー、もし良かったら上がってけよ。散らかつてるけど」

「え、いいの？」

こくりと頷く翔ちゃん。

「じゃ、遠慮なく」

そのあとおばちゃんもエプロンで手を拭きながらやってきて、私の中に迎え入れてくれた。

廊下の突き当たりの部屋に通される。

かなり久しぶりに入る翔ちゃんの部屋。以前とあまり変わっていないが、少しだけ嬉しかった。

「適当に座って」

「あ、うん」

本当に適当に、ベッドの上に座った。ぼふっと少しだけ情けない音がした。

「久しぶりだね、翔ちゃんの部屋入るの」

「そうか？」

「うん。中学生のとき以来だよ。二年ぶりくらい」

部屋の中を何気なく見回していると、おばちゃんがジュースとクッキーを持ってきてくれた。

夕飯も食べていかなかったと聞かれたけれど、それはさすがに図々しいので断った。

少し残念そうに、おばちゃんはゆっくりしていったね、といって再びリビングの方へと戻っていった。

「ゲームでもするか？」

「どんなのがあんの？」

「アクションがほとんどだな。あ、でもぶよぶよならお前もできるだろ」

「あ、今ちよつと馬鹿にしたでしょ」

「わかった？」

「ひつどおい。ぶよぶよでいい。絶対勝つんだから」

確かにゲームは苦手だけど。結構得意なんだぞ、ぶよぶよ。

機械を出してきて、線をつなぐ。

さあ始めようとコントローラーを手にしたとき、翔ちゃんの携帯が鳴った。

翔ちゃんは断ってから電話に出る。

そういうちよつとしたところも、素敵だなあとか思ってしまう。



少し話してから、翔ちゃんは携帯を閉じた。

「わりい、ちょっと行かなきゃ駄目になった」

「そっか。女の子？」

「ん、まあな。」

「モテる男もたいへんだねえ。じゃ、私帰るわ」

「ごめんな」

「全然いいって。気にしないでよ」

二人揃って部屋を出る。

おばちゃんに挨拶をしてから、靴を履き、マンションの廊下へ出た。

外は少しだけ冷えていた。もう、五月だというのに。

一つ階段を下りたところで翔ちゃんと別れる。

軽く手を振ってから再び下へと降りていく翔ちゃんの背中を、見えなくなってもしばらく見ていた。

翔ちゃんが今向かってるのは、誰のところなのだろう。

翔ちゃんが行かなきゃいけないって言ったとき、ほんとですごく寂しかった。

でも翔ちゃんはひっこい女は嫌いだから。引き止めることなんて、私はしない。

ちゃんと笑って。でも本当は泣いてしまっくらい辛かったり。

だからほら、今は近くの明かりさえ涙でぼやけちゃう。

もう。こんなんじゃ家に帰れないじゃん。

翔ちゃんのか。

### 3 ふよふよ

#### 3 ふよふよ

ドアのチャイムが鳴って、俺はいつもみたいに聞こえないふりして、たまには出て欲しいわとかなんとか言いながら、母さんがインターフォンのディスプレイの所まで歩いていくのが聞こえた。

どうせ新聞の勧誘かなんかだろうと思っていたから、母さんが「奈緒ちゃん」と言った時は思わずドキリとした。

それから少しして、奈緒ちゃんが来てくれたから出てあげてと母さんが言いに来た。

面倒くさいなあとか言いながらも、玄関へ向かう。

そんな俺を母さんは変な笑顔で見てる。たぶん、この人には隠し事はできない。

ドアを開けると、ジーンズに淡い色のロングTシャツを着た奈緒が立っていた。

母さんが出てくると思っていたのだろっ、俺の顔を見ると、奈緒は少し驚いたような顔をした。

ああ、それすらも可愛いと思っちゃってるし。

おせんべえを俺に渡し、帰ろうとした奈緒を母さんの声が引き止める。

ナイス、母さん。

「あー、もし良かったら上がってけよ。散らかってるけど」

「え、いいの？」

こくりと頷く。

「じゃ、遠慮なく」

にっこり笑って、奈緒がうちの中へ入っていく。

その、前に行く小さな背中が、奈緒が女だと言つことをありありと俺に感じさせる。

相模奈緒。俺の幼馴染。

そして、

俺の好きな女。

「適当に座って」

「あ、うん」

部屋に入り、奈緒がボフリとベッドの上に座る。

「久しぶりだね、翔ちゃんの部屋入るの」

「そうか？」

「うん。中学生のとき以来だよ。二年ぶりくらい」

もうそんなになるのか、とか思いながら、頭の中で必死に最近の記憶を探る。

まあこの年の男の子ですから。とっても健全な男の子ですから。

やっぱりそういうモノは持っているわけで。

たしか、何本かはこの前宮本（友達）に貸してまだ返ってきていない。

他は、たぶんクロゼットの奥のほうに閉まってあるはず・・・。

よし、なんとか大丈夫。

その後母さんがジュースとクッキーを持ってきて、少しだけ奈緒を喋った後、またリビングの方へ戻っていった。

ん、ちょっと待てよ。

今、奈緒と二人きりじゃん。

ちらりと奈緒のほうを見る。まだ懐かしそうに部屋の中を見回していた。

何にも知らないような無垢な顔して（いや、もしかしたら本当に何も知らないのかもしれない）。

そついうの見たら、やっぱり俺は奈緒にとってはただの幼馴染なんだなって。

だから、二人きりでも、何にもすることできない。

「ゲームでもするか？」

「どんなのがあんの？」

「アクションがほとんどだな。あ、でもぶよぶよならお前もできるだろ」

「あ、今ちよつと馬鹿にしたでしょ」

「わかった？」



「ひつどおい。ぶよぶよでいい。絶対勝つんだから」

奈緒がゲーム弱いことくらい、もうずっと前から知ってる。

あと、アクションとか、暴力系なのが嫌いなのも。

ぶよぶよは、奈緒が唯一気に入ったゲームで。

だから、俺もぶよぶよが好きになって。

機械を出してきて、線をつなぐ。

さあ始めようとコントローラーを手にしたとき、俺の携帯が鳴った。

ごめんと断って、携帯を開く。

ディスプレイを見ると、この前から付き合い始めた女の子からだった。

「もしもし」

『もしもしい、アイだけどお』

「なに？」

『なんか、別れるとか意味分かんないメルきてたんだけどお』

うん。送ったもん。

「意味はわかるでしょ。ごめんだけど、そういうことだから」

『えゝ嫌だ嫌だ！こっち来て。会いたい。あつて話したいよお！』

「話すも何も、」

『すぐ来てくれないと川に飛び込んで死んでやるんだから！』

「わかったよ。行くから。場所どこ」

今彼女のいる場所を聞いて電話を切る。

こういう、全身フェロモンでできてますみたいな女は正直好きじゃない。

皆の前ではあくまでも好きな風に装ってるけど。

「わりい、ちょっと行かなきゃ駄目になった」

「そっか。女の子？」

「ん、まあな。」

「モテる男もたいへんだねえ。じゃ、私帰るわ」

「ごめんな」

「全然いいって。気にしないでよ」

二人揃って部屋を出る。

靴を履き、マンションの廊下へ出た。

別れ際も、奈緒は相変わらず笑顔で手を振った。

それがなんだか嫌で、そのあとは一度も振り返らずに一気に階段を駆け下りた。

俺と奈緒は幼馴染で、奈緒にとって俺は男じゃないっていうことくらい、表情とか見てたらわかる。

俺の気持ち知ったら、たぶん奈緒は困るから。

もう今までどおりに話すこともできないとか、やっぱりかなり辛いからさ。

だから、わざと他の女の子と沢山遊ぶ。

あたかも、奈緒には興味ありませんよおって。

ほんととさ、奈緒以外の女なんて、どれも皆同じなんだよ。

何も感じない。

抱きたいとも、キスしたいとも思わない。

そう思うのは、やっぱり奈緒だけで。

その日に、アイとはやっぱり別れた。

そのかわりしっかりディナーを奢らされたけどね。

## 4 手

### 4 手

最近日差しが強くなってきて。

もう夏だな、とか思ったり。

今日も、入梅前のあの爽やかな天気。

なのに私の体調は最悪だった。

女の子にしか分らない、アレのための貧血。

一応ブルーイン食べてきたんだけどな。やっぱり効果無し。

体操服に着替えながら、こんな熱そうな外で今から体育とか大丈夫かな、と少し心配になる。

でも今日は合同体育。

AクラスとDクラス。

Aは私のクラスで、Dには翔ちゃんがいる。

だから今日の体育はサボったりできないとか、かなり不純な動機です。ごめんなさい。

ロッカーを出て、日焼け止めで幾分白くなった顔の加奈と小百合と喋りながらグラウンドへ向かう。

加奈と小百合とは一年の時からクラスが一緒に、それからかなり仲良し。

「あつち。絶対焼けるし!!」

外に出るなり小百合が悲鳴をあげる。

「今日合同でしょ？何やるか知ってる？」

「なんかドッジやるらしいよ」

「げ。私ドッジ嫌いなのに」

とか言いながら、加奈は何でもできる。

勉強も、スポーツも。

「でもさ、男子とは別だし」

「小学校のときは男子も一緒にやってたもんね。かなりスリリングだったし！」

「男子と別ってだけでも、小学校のときに比べたらかなりマシかも」

とか話してて、なんでいつもこうなるかなあ。

始まってみると、今日は何故か男女混合でやるとか先生が言い出した。

女子からはブーイングの嵐だったけど、男子は乗り気で。

結局男女混合でやることになった。

クラス対抗ということになって、数人が外野に出て残りは皆箱の中。



私も外野で出たかったけど、最後の最後でジャンケンで負けた（加奈と小百合は一番に勝って、さっさと外野に出て行った）。

ふと相手のチームのところを見ると、翔ちゃんも内野らしく、数人の男子と楽しそうに何か話していた。

あー外野なりたかったな。

そしたらもうちょっと翔ちゃんに近づけたのに。

「相模さん、大丈夫？」

「え？」

いきなり声をかけられて、少し驚いて振り向くと、クラスメイトの上条くんが心配そうな顔をして立っていた。

「顔色悪いから」

たしかに、さっきより正直しんどい。

「大丈夫。ありがとう」

「そお？」

「うん。心配してくれてありがとね。」

「しんどかったら無理しちゃ駄目だよ」

そう言つて、上条くんは相手チームの方へと走っていった。

上条くんって優しいな。顔もかっこいいし。

そんなことを思っていると、ふと翔ちゃんと目が合った。

ちよっぴり嬉しくて、小さく手を振った。

でも、翔ちゃんはふいと顔を背けて、もうこちらを見ようとはしなかった。

あれ？私なにかしたのかな。

なんだか気になって、ずっと翔ちゃんのこと見ていたけど目を合わせてくれるかんじもしなくて、だんだんと悲しくなってきた。

フラフラする頭で、嫌われたらどうしようっていう不安がぐるぐると渦を巻く。

そのときだった。

「あぶない！」

ガン！と男子の投げたボールがきれいに私の頭にヒットし、うわ、私がかっこわる、とか思いながら、上条くんの心配そうな声が聞こえたような気がしたが、私はとうとう意識を手放した。

「ん・・・」

夢なんて見なかった。

うつすらと目を開ける。少し固めのスプリングの感触で、ここが保健室だとわかる。

「・・・わたし・・・」

「大丈夫か、奈緒」

「翔ちゃん・・・？」

穏やかな顔をした翔ちゃんが、私の顔を覗き込んでいた。

「お前倒れたんだよ。みごとにボールが頭に当たって」

「ん」

そうだった。

「ここまで・・・翔ちゃんが運んでくれたの？」

「まあな。かなり重かったし」

失礼しちゃう。

いつもならここで文句の一つくらい言っでやるところだけど、今の私は、なんだか少し変だ。

普段と変わらない翔ちゃんの冗談に、ものすごく安心してしまっ

「おい、なに泣いてんだよ?!どこか痛いのか?」

涙が止まらないよ。

「翔ちゃん、私、何か嫌なことしちゃったかなあ」

ゆっくりと体を起こす。

「は?」

「体育の時間、翔ちゃん私のこと無視した」

「それは・・・そんなこと、ねえし」

「したもん」

「・・・」

「翔ちゃんに嫌われるの、私嫌だよ」

こんなじゃ駄目だ。泣くの止めなきゃ。

でも止まらなくて。

ベッドの端に軽く腰掛けた翔ちゃんが、少し困った顔をする。

「翔ちゃん、翔ちゃん」

「ん」

「翔ちゃん、私のこと、嫌いにならないで」

「・・・ならないよ。奈緒のこと、嫌いになんかならないから」

そう言いながら、翔ちゃんは優しく私の手をにぎってくれた。

「ごめんな。奈緒」

繋いだ手から伝わる翔ちゃんのぬくもりを感じるほど、なんだか切なくなっていく。

こんなの、ただの鬱陶しい女じゃん。

けど、

今だけ。

今だけでいいから。

翔ちゃん。翔ちゃん。

もう少しこのまま、この手を離さないで。





#### 4・手（後書き）

はじめまして。

木村よしといいます。

『翔ちゃんによろしく』にアクセスしていただき、本当にありがとうございます。

もしも「この展開、こうした方がよかった」などありましたら、よければ批評してやってください！

皆様のご意見を参考にして、もっともったいい作品を書いていけるようにがんばります

これから、木村よしと『翔ちゃんによろしく』をどうぞよろしくおねがいいたします。

## 5・ベッド

### 5・ベッド

宮本たちが楽しそうに話しているのを聞きながら、ちらりちらりと奈緒の方を見る。

なんだか今日は顔色が悪い。

いつも一緒にいる桜井（加奈）や藤井（小百合）は何も気づかないのだろうか？

何度も何度も眉間を中指で押さえる奈緒。あれは大抵いつも体調が悪いときにする、小さい頃からの奈緒の癖だった。

大丈夫だろうか、それから何度もか見ていると、男子が一人奈緒に近づいて行くのが分かった。

名前は知らないが、まあそこその奴であることは、こっからでも見て取れた。

誰だ、あれ。

心臓が少しだけ早くなる。

そいつに優しく笑顔をつくる奈緒。

そんな顔、他の奴に見せるなよ。

そいつのこと好きなのかよ。

なんだか無性に苛々してきた。

ふと目が合い奈緒が手を振ってきたが、笑顔で返すような気分じゃなくて、思い切り目をそらした。

そのときだった。

誰かの叫ぶ声が聞こえて、一気にグラウンドの空気が変わる。

見ると人だかりの真ん中に奈緒が倒れていた。

「奈緒?!」

「大丈夫?! 奈緒!!」

桜井や藤井、それから他のクラスメイトたちの声が聞こえる。

「下手に動かさない方がいい」

「たしかに上条の言うとおりだ」

近づいてみると、さっきの男子と先生が話していた。

「上条、相模を保健室に連れて行ってくれるか」

「はい」

上条とかいう奴が、しゃがんで奈緒の体の下に手を差し入れようとする。

「俺が行く」

「え？」

突然出てきた俺に、少し不信な顔をする上条。

「僕一人で大丈夫だよ」

「いいから」

「でも」

「俺が行くつつってんだから、さっさとどけよ！」

つい大きな声になってしまった。

俺の声でその場がしんとなる。

倒れている奈緒を見る。

「ちっちええなあ」

頭と腰の下に手を入れ、持ち上げる。

その軽さと、女の子特有のあのやわらかさに、思わずときりとする。

なんだか奈緒のことを上条に見て欲しくなくて、くるりと背を向け、俺はさっさと歩き出した。

保健室のドアには、不在とかかれたカードが掛けてあった。

どうしようか少し迷ったけれど、とにかく横にしてやろうと思い、そのまま保健室に入った。

奈緒をベッドの上に降ろし、布団を掛けてやる。

静かな時間だった。

横になって、幾分顔色が戻ってきた奈緒に、少しほっとする。

窓から射し込む光が当たって、奈緒の髪がとても綺麗に感じられて。

サラリとそれに触れてみた。

「奈緒」

もちろん、返事はない。

「奈緒」

その続きは、言うてはいけないような気がした。

たとえ誰も聞いていないとしても。

言ってしまうと、たぶんもう止める事ができなくなるから。

「ん・・・」

ぴくりと奈緒の眉が動き、それからゆっくりと奈緒は目を覚ました。

「・・・わたし・・・」

「大丈夫か、奈緒」

「翔ちゃん・・・？」

まだ夢と現実の境目にいるような、そんな顔をしている。

「お前倒れたんだよ。みごとにボールが頭に当たって」

「ん」

どうやら思い出しらしい。

「ここまで・・・翔ちゃんが運んでくれたの？」

「まあな。かなり重かったし」

いつもみたいに言い返してくるだろうと思っていたのに、何も言っていない奈緒。



どうしたんだと思った途端、奈緒はいきなり泣き出した。

「おい、なに泣いてんだよ?!どこか痛いのか?」

久しぶりに見た奈緒の涙。

「翔ちゃん、私、何か嫌なことしちゃったかなあ」

奈緒がゆっくりと体を起こす。

「は?」

「体育の時間、翔ちゃん私のこと無視した」

「それは・・・そんなこと、ねえし」

「したもん」

「・・・」

「翔ちゃんに嫌われるの、私嫌だよ」

そんなこと言うなよ。

変に期待したくなる。

「翔ちゃん、翔ちゃん」

「ん」

「翔ちゃん、私のこと、嫌いにならないで」

そんな顔させたいわけじゃないのに。

奈緒の涙が見たいわけじゃないのに。

「・・・ならないよ。奈緒のこと、嫌いになんかならないから」

いつも笑っていて欲しいのに。

奈緒を泣かせてしまっているのは、俺の、奈緒のとは違う想いで。

今だって、ほんと抱きしめたくてしょうがないんだ。

その小さな体を、自分のものにしてしまいたくてどうしようもないのに。

でも、俺は幼馴染だから。

ただ、手を優しく握った。

「ごめんな。奈緒」

もしかすると、いつかこの関係を壊してしまう日がくるかもしれない。

そしたら、やっぱりまた奈緒は泣くのかな。

ごめんな、奈緒。

奈緒のこと、好きでごめん。



## 6 パラソル

6 パラソル

七月に入った。

なかなか梅雨が明け切らず、どんよりとした雨降りが続く。

放課後、靴を履き替えていると翔ちゃんに会った。

「あ、翔ちゃん」

「よう。帰んの？」

「うん。翔ちゃんは？」

「俺も」

もうすぐ期末テストが始まるから、図書室で勉強してから帰る人も結構多い。

でも、私も翔ちゃんも、家以外で勉強するのはあまり好きじゃない（というか、勉強が好きじゃない）。

お互い一人だったから、一緒に帰ることにした。

サアサアと、細かいミストのような雨が降っている。

「雨、止まねえな」

「そうだねえ」

言いながら傘を広げる。

私の傘はパステルピンクで、翔ちゃんのは飾りっ気の無い紺色だった。

並んで歩くと、いかにも女の子と男の子という感じになるんだろうなと思います、ちょっぴり嬉しくなる。

雨が、二つの傘を優しく叩く。

「翔ちゃんテスト勉強してる?」

「当たり前」

「えーしないでよ」

「嫌だね」

「ま、翔ちゃん、今度赤点取ったら古典やバいもんね」

「・・・」

翔ちゃんは古典が大の苦手なのだ。

「でも、テスト終わったら夏休みだ」

「・・・そうだな」

「翔ちゃん、夏休みどっか行ったりするの?」

「んー、ばあちゃん家くらいかなあ。お盆にな。奈緒は？」

「わかんない。でもたぶんどっか行くと思う」

「そっか」

「うん」

少しの間会話が途切れる。

でも、この何も話していない時間も結構好きで。

翔ちゃんの方をちらりと見ると、紺色の傘だけしか見えなかった。

「祭り、一緒に行くか？」

「え？」

いきなりで、少しびっくりする。



「テスト終わった日の夜に花火大会あるだろ」

「そうなの？」

「なに、お前知らないのかよ」

おくてんな〜と得意げに笑う翔ちゃん。

軽く馬鹿にされているけれど、やっぱりすごく嬉しくて。

「で、どうすんだよ」

「行く！」

「よし」

テスト、がんばらなきゃな。

早く終わってくれないかな。

急に楽しくなって、少しだけ翔ちゃんに近づいた。

すると、ポンと傘同士が当たって。

「ごめん」と言って、またもとの場所に戻った。

一定の距離をはさんで歩く、私と翔ちゃん。

雨、早くやまないかな。

## 7 花火

### 7 花火

帯が、少し苦しいな、なんて思う。

テストが終って、一旦家に帰った。

待ち合わせ十分前にやっと浴衣を着終わって、急いで川原の土手の方へ向かう。

広い川に面したそこは、もう沢山の夜店が並んでいた。

カランコロンカランコロン

ぞうりが軽やかな音をたてるが、履いている足は、実はものすごく痛い。

やっぱりジーンズとTシャツにしておけばよかったかな。

そんなことを思っているうちに、待ち合わせ場所の階段の所に着い

た。

翔ちゃんはもう来ていて。

浴衣ではなかったけれど。

あっさりと着こなしたブルーのワイシャツがやけに似合ってた。

「おせえよ」

言葉とは正反対の優しい笑顔。

たぶん私はいま、ものすごく赤くなってる。

「遅くなってごめんね」

下を向いてもごもご言う。

こんな顔見られたら、きつとからかわれるに決まってるもん。

「浴衣」

「あ、うん。慣れてなくて。これ着てたら遅くなった」

「ふっん」

言いながら、翔ちゃんが私の髪をさらりと撫でる。

少し驚いて、ぱっと上を向く。

「いいじゃん。似合ってる」

それは、女の子に向ける言葉のようで。

甘く私を痺れさせる。

麻酔のようだ。

つい、酔わされてしまいそうになった。

「な、なに言ってるの！どうせ他の女の子にも、同じようなこと言ってるんですよ」

ぷい、と翔ちゃんに背を向ける。

私にだけ、なんてあり得ないから。

「ささやかなリップサービスだよ。ありがたく受け取れ」

ほらね。

ああ、もう。なんで翔ちゃんみたいなのが好きになっちゃったんだろ。

「馬鹿なことやってないで。私力キ氷食べたいんだから」

一人で歩き出す。

顔を、見られなくなかった。

今は、たぶん泣きそうな顔をしてるから。

「はいはい」

相変わらず笑いながらついてくる翔ちゃんに、心の中で「バカヤロオ」と呟いてやった。

カキ氷を食べた後、ゆつくりと色々な屋台をまわった。

焼きそばも食べたし、海老せんも買った。

翔ちゃんは、昔のアニメのお面を買って、頭につけて喜んでいた。

でも、どの時も、決して恋人のように手を繋ぐことはなくて。

だけど私は、ものすごく幸せだったんだよ。

「あれえ、中村くんじゃん!」

「あ、ほんとだ」

知らない声が翔ちゃんを呼び止める。

振り向くと、少し派手な女の人が二人。

「よお。久しぶり」

「久しぶり〜！元気だったあ？」

「まあな」

誰だろう、この人たち。

私がそんな顔をしていたのだろう、

「あ、あたし中村くんのもトカノでえす」

目が合った片方の女の人が笑いながら言った。

それを聞いて、大体予測はできていたけれど、やっぱり複雑な気持ちになる。



「中村くん、その子だね？」

「え、ああ。奈緒っていうの」

「中村くんの新しい彼女とか？」

『彼女』という言葉に、少しドキリとする。

「あゝ違う違う。ただの幼馴染だから」

「あは！だよね。だって全然中村くんのタイプじゃないし！」

「たしかにい！」

ギャハハと大きな声で笑うモトカノとその友達。

そのときは、翔ちゃんのことを見ることもなてできなかった。

「私、帰る」

こんな所にいたくないよ。

「え、奈緒?!」

走り出した私に、翔ちゃんたちの驚いた声が聞こえた。

それでも私は止まらなかった。

カランコロンカランコロンカランコロン

うまく走れない。

浴衣なんか、着てくるんじゃない。

カランコロンカランコロンカランコロン

どんなに頑張ったって、私はあの人たちみたいに大人っぽくなんてなれないのに。

どこかで、今日だけは、翔ちゃんは私だけを見ててくれるかもしれないって思ってた自分がいて。

カランコロンカランコロンカランコロン

せめて今日だけは、二人でいたかったよ。

幼馴染だっことを忘れて。

「奈緒！待てよ！」

さっきの場所からそんなに離れていない場所で、翔ちゃんが私の腕を掴んだ。

「どうしたんだよ、急に」

「放してよ」

「言ってくれなきゃわかんないだろ」

「放してっばー！」

思い切り腕を振り、翔ちゃんの手を振りほどく。

「なんでも・・・ないから・・・」

「なんでもないわけないだろ」

翔ちゃんが、困ったように一つため息を吐いて、顔を覆っていた私の腕を、再び掴んだ。

「お前泣いてんじゃん」

まばたきをする度に、ぼろぼろと涙が頬を伝う。

一度溢れ出したそれは、もうどうしようもなくて。

「翔ちゃんは、何もわかってないよ」

「なんのこと、」

ピューー

「翔ちゃん、私は翔ちゃんのこと・・・!」

ドーーーーン!

夜空に打ち上げられた、真っ赤な花火。

その大きな音に遮られて、私の言葉は結局誰にも伝わることとはなかった。

私と翔ちゃんは、そのいきなりの大輪に、ただただ夜空を見上げていることしかできなかった。

私の想いは、花火にさえも隠されて。

やっぱり伝えるべきじゃないんだって。

そう思うと、なんだか笑えた。

「奈緒・・・?」

「うっん。翔ちゃん。なんでもないの」

いろんな色の光が、私と翔ちゃんの顔を照らす。

相変わらず涙は止まらなかったけれど。

夜空には沢山の花が咲き乱れていた。

## 8 合コン（前書き）

この辺りから奈緒と翔の関係が変化していきます。  
よかったら読んでください

## 8・合コン

### 8・合コン

「奈緒その髪型超カワイイ」

夜の七時。

加奈がお化粧バッチリの顔で微笑みかける。

「奈緒、今日はタカシに頼んでイイ男を集めてもらったから。N高だよ?! 頭良し、顔良しって、もう言うことないし! しっかり彼氏ゲットしなきゃね」

「うん、ありがとう」

興奮気味の小百合。今日は三対三のコンパなのだ。

「でもさ、奈緒から合コンしたいなんて初めてじゃない?」

「そ、そうかな?」



なんだかもう、ちょっぴり疲れちゃったんだよね。翔ちゃんを想い続けるのが。

私も彼氏とか作ったら、忘れられるかなって思ってたさ。

「あ、来た。あれじゃない？あの三人組。」

手を振る小百合に向こうも気がついたみたいで、爽やかに笑いながらこちらへやって来る。

三人とも、育ちの良さそうな、エリート王子様。

出会えたところで、近くのイタリアンレストランへ。

通されたテーブルに適当に向かい合って座る。少し賑やかな、でも煩すぎない、感じのいい店内だった。

まず、自己紹介を軽くして、運ばれてきた料理を食べながらお互いの学校のことなどを喋る。

相手の子たちは、頭も良くてお金持ちで、その上かっこいいのに、

そんなこと全く鼻にかけることなんてなくて、本当に好感の持てる人たちばかりだった。

「ペペロンチーノお持ちしましたあ」

ん？どこかで聞いた声。

ふと顔を上げるとそこにはウェイター姿の翔ちゃんが。

「あ」

「あ」

こついう場では会いたくなかった。

「中村くんじゃん。なに？ここでバイトしてんの？」

「違う違う。今日はちょっとダチに頼まれて代理」

「そっかあ。おつかれえ」

少し長めの茶色い前髪が、ピシッとした制服とはちょっぴりミスマ

ツチで、なんだか翔ちゃんらしいなって思った。

「てか桜井も藤井も超キレイ。合コン中？」

「そつだよ。中村くんだってその制服かなりイケてるよお」

「さんきゅー」

やっぱり女の子の扱いに慣れてるなあと思って、ため息を小さく吐いたとき、ふと翔ちゃんがこつちを向いて目が合った。

「てか奈緒が合コンとか。普段色気ねえからなんかおかしいかも」

ふつと鼻で笑うように、翔ちゃんは言った。

「髪型とか、かなり気合入ってんじゃない？」

面白い口調とは反対に、細められた目はなんだかすごく冷たくて。

なんで、そんなこと言うの？

恥ずかしくて、なんだか居た堪れなくて、思わず目を瞑り下を向く。

ああ、もう最悪。

翔ちゃんに言われたことで、更にキツイ。

「僕は、普段からお洒落に気をつかってる子も良いと思うけど、特別な日にだけ頑張る子も可愛いと思うな」

その言葉にぱつと顔を上げる。

目の前に座ってるN高の王子様。西田くんっていったっけ。

「それに、相模さんはすごく魅力的だと思うけど」

優しく微笑む西田君に、思わず赤面してしまう。

「ご注文は以上でお揃いですか。では、ごゆっくりどうぞ」

いきなり翔ちゃんは営業の顔に戻って、伝票だけ置いてさっさと厨房の方へともどっていつてしまった。

それから皆でまた色々喋って、十時くらいに今日はこれでオヒラキにしようかってなった。

店を出て、それぞれ帰り道に別れる。私は西田くんと同じ方向だった。

夜の道で二人並んで歩く。

「相模さんって、彼氏とかいないの？」

「いないよ。いたら合コンとかしないって」

「えゝこんなに可愛いのに」

「もお。何にも出ないよ？」

「今日さ、もうどこかに泊まってかない？」

「え？」

泊まるって？え？

「シたい。相模さんと」

・・・。

するって何を、なんて聞かない。こんな展開でやることって言った  
ら、一つしかないじゃん。

「え。ごめん。今日はもう帰らなきゃ」

「いいじゃん。金ならあるからさ」

「ごめん、ほんと無理・・・」

なんか怖くなって離れようとしたら、腕をぐいと掴れた。

「嫌な思いとかさせないからさあ」

「やだってば、」

「なあにやってんの？」

ぱつと声のほうを向く。

「翔・・・ちゃん・・・」

「なんだよ。邪魔すんなよ」

「そいつはやめといたほうがいいって。しっかり見てみ？胸とかま  
ったくないじゃん。絶対満足できないって」

・・・ちよつと傷つくんですけど。

「は？おまえには関係ないだろ。どっか行けよ。」

そう言つて、私の腕を掴む西田君の腕が更に強くなる。

はあー、とため息を一回。

その後翔ちゃんはズカズカとこちらへ歩いてきて、

がつん。

西田君が顎を押さえてしゃがみこむ。

「やめろつつつてんだから、一回ではなせや、このヤロオ」

西田君がギツと睨んだが、翔ちゃんの方が強かったみたいで、目が合うなりぱつと向こうを向いてしまった。

「ほら、帰るぞ、奈緒」

ぎゅっと手を握られて、思わずドキリとする。

ごめんね、と小さく呟いて、私も西田君に背を向けた。

「お前、馬鹿か。夜道で男と二人きりになって何考えてんだよ」

「だって・・・」



「それとも、ほんとは襲って欲しかったとか？」

「な・・・！そんなわけないでしょ！すっごく、怖かったんだから・・・」

思わず涙が溢れて、足を止めてしまった。翔ちゃんも、ぴたりと進むのを止める。

手は、つないだまま。

「ごめん。悪かったよ」

「・・・うつん。助けてくれて、ありがとう」

そして再び歩き出す。

「もう合コンなんてすんなよ。男なんてみんなあんなだから」

自分だって、何回もしてるくせに。

「合コンなんかじゃなくて、もっと自然に好きな奴ができるの待てよ」

「・・・好きな人くらい、もういるもん」

そう言ったとたん、今度は翔ちゃんが足を止める。後ろを歩いていたら私は、思わず翔ちゃんの背中にぶつかってしまった。

「いた・・・」

「・・・だれ、それ」

「え？」

「お前が好きなのって、誰だよ」

「い、いえるわけじゃないじゃん！そんなの、翔ちゃんには言えないよ」

言ったら翔ちゃん、私のこと嫌いになっちゃったでしょ？

「・・・こつから、一人で帰れるだろ」

するりと離れていく翔ちゃんの手。ぽつと踵を返して、再び街の方へと歩いていく翔ちゃん。

「え？ちよつと！翔ちゃん?!」

私、何か変なこと言った？

私の声に振り向くことなく、そのまま遠くへと消えてしまった。

今までつないでいた右手を見る。そこだけ、ぽうつと熱をもっているみたいに熱い。

でも今は夜の空気に晒されて、すうつと冷たくなっていく。

涼しい夏だなんて思う。

翔ちゃん、好きな人は、翔ちゃんだよ。

ちよつと優しくされて、ずっと手をつないでいられるような気がして、だから余計寂しくなるの。

気づかれてないよね？

ちゃんと、ただの幼馴染でいられてるよね？

たまに不安になる。

この気持ちに気づかれてしまったら、きっと翔ちゃんは私から離れて行ってしまうから。

私の右手には、もう翔ちゃんの手感触はほとんど残っていないかった。

## 8・合コン（後書き）

どうも。

木村よしです。

ここまでいくつかの短編の集まりって感じていたね汗。  
でも一応、ここから物語が発展していく予定です！

小説連載続けていけるのは、皆様がよしの作品を読んで下さるからです。

ここまで読んでくださっている方、本当にありがとうございます！

これから『翔ちゃんによろしく』をどうぞよろしくお願いいたします。

## 9・ノート

### 9・ノート

チャイムが鳴って、賑やかになって、これはいつもの昼下がり。

コンビニで買ってきたパンに噛り付きながら、加奈は機嫌が悪かった。

「昨日はN高っていうから皆紳士なんだろうなあっとか思ってたのに、結局頭の中はそこらへんのピーマンと同じだったわよ！」

昨日のあの合コンの帰り、加奈と小百合もやっぱりホテルに誘われたらしい。

「思いつきり急所蹴飛ばしてやったわよ！ね、加奈」

「当ったり前よ。出会ってすぐとか有り得ないもん」

話を聞いていて感心しちゃう。やっぱり女の子も自分の身は自分で守れないといけない時代だもんね。

「奈緒も誘われたんでしょ？」

「あ、うん」

「奈緒、大丈夫だった？奈緒なんて特に弱そうだし、しかも一人だったじゃない、あの時」

「よく無事だったわねえ」

「実はね、たまたま翔ちゃんが通りかかって、助けてくれたの」

翔ちゃんが現れたとき、ものすごくホッとしたのを覚えてる。

「中村くんが？」

「うん」

「うっそ！超かっこいいじゃん、それ」

興奮気味の小百合。

実際、かなりかつこよかったもん。

「奈緒と中村くんってたしか幼馴染だったよね？」

「そうだよ」

「いいな、あんなかつこいいのと幼馴染で」

「そうかな」

曖昧に笑う。

私は小百合たちの方が羨ましいよ。

翔ちゃんにとっての、女の子、でいられるでしょ？

「てか、奈緒と中村くんって付き合ってたいの？」

「え?!」

いきなり何言い出すんだか。



「つつつ付き合ってるわけないじゃん。幼馴染だよ？」

変な噂が流れて、もしも私の気持ちが何らかの形で翔ちゃんに知られてしまったら。

もう、一緒にいらなくなる。

「でもさ、奈緒は中村くんのこと好きじゃん？」

「そ、そりゃ普通に幼馴染だし？嫌いじゃないよ」

早くこの話題終れ。

「違うくて。奈緒は中村くんのこと、男の子として、好きなんだよねってこと」

「ち、ち、違うし！勘違いだって」

お願い。

これは、私だけの気持ちなのに。

「嘘ー、絶対好きだって」

「ちが」

「奈緒は中村くん一筋だも」

「翔ちゃんなんて好きじゃないよ!」

思わず大きな声を出してしまった。

啞然とする小百合。

「な、奈緒。ごめん、ちょっとからかいすぎ」

「あ・・・中村くん・・・」

「え」

しまったというような顔をする加奈の視線の先を振り返る。

翔ちゃんが、立ってた。

「翔ちゃ」

「これ、借りてたノート。返すから。さんきゅな」

ノートを机の上に置き、翔ちゃんが足早に教室を出て行く。

「翔ちゃん待つて！翔ちゃん！」

どんなに呼んでも、振り向いてくれないことは分かった。

でも、追いかけることなんてできなくて。

「奈緒……ごめん……」

「ごめん……」

「・・・二人が、悪いんじゃないよ・・・」

だって、結局自分を守るために言っちゃった言葉でしょ？

本気で好きだなんて知られたら、嫌われちゃうって。

でもさ、なんで？

好きって言わないかわりに、きつと、もっと翔ちゃんを傷つけた。

「あのさ、こんなときにナンなんだけど、中村くん、昨日たまたま通りかかったんじゃないと思う・・・」

「え？」

何言ってるの？小百合。

「うちらが店を出るより二時間くらい前に、もうバイトあがってたもん」

「奈緒?!」

気がついたら走り出してた。一つ下の階の翔ちゃんのクラスまで。

え。うそだあ・・・

ほんとだつて。私たちがまだ楽しくやってたとき、私服に着替えた中村君が出て行くの、私見たんだ

ドアを勢い良く開けると、反対側の枠に思い切り当たってすごい音がした。一瞬教室の中がしんと静まり返る。

翔ちゃんは、机に突っ伏して寝ていた。

「翔ちゃん、翔ちゃん!」

袖を何度か引っ張ると、ゆっくりと頭が持ち上がる。

私と目が合った瞬間、翔ちゃんは眉間に深い皺を入れてすごく不愉快な顔をした。

「・・・なに」

「翔ちゃん、昨日私のこと待っててくれたの？」

「・・・」

「ほんとに、バイト結構前に終わってたんでしょ？私全然知らなか」

「なに、勘違いしてんの？」

翔ちゃんの目が、スッと細くなる。

まるで私を嘲るかのよう。

「バイトは確かに早く終わったけど、別にお前を待ってたわけじゃない」

「・・・」

「昨晚お前が誘われてたところに、ほかの奴と行ってたんだよ」

私が誘われていたところ。

昨日の晩、私が連れて行かれそうになった、ああいう場所。

「たかが幼馴染を、わざわざ心配して待つわけないじゃん」

ああ、もう。なにやってんだろ、私。

変に期待しちゃって。

一人でテンパって。

私はただの幼馴染ってこと、忘れたわけじゃなかったんだよ？

自分の教室に戻ったとき、私の顔を見た加奈と小百合が駆け寄ってきて、二人に抱きしめられながら、声を殺して少しだけ泣いた。



## 10・キラキラミニィ

10・キラキラミニィ

『翔ちゃん』

いつから、こうやって呼んでたっけ。

『奈緒』

そう呼ばれるのは、もう当たり前だと思ってた。

翔ちゃんと私は、もう気がついたときには一緒に遊んでいた。

同じマンションだということもあったんだと思う。

親同士も仲が良くて。家族ぐるみの付き合いってやつ？

でもそれは、漫画なんかにあるような、将来結婚しようねっていう仲では決してなくて。

真夏の太陽の下で、夏休みは毎日一緒に遊んだ。

私は小さな頃からどんくさくて。

いつも前をいく翔ちゃんのを背中を必死で追いかけてた。

一生懸命走っているときに、何も無いのによくこけていた。

その度に、前を歩いていた翔ちゃんは私のところまで戻ってきてくれて、

「大丈夫か？奈緒」

そう言って、すっと手を差し伸べてくれた。

そのときの翔ちゃんの手は、汗でちょっぴり湿っていたけど、私にはそれがなにより優しく感じられたんだよ。

あの後、翔ちゃんとは一度も顔をあわせることは無かった。

そのまま家に帰って。

明日学校行きたくないなって思っ

てもやっぱり気になって、早く会って、しっかり謝りたいとも思ったり。

翔ちゃんなんて好きじゃないよ!!

頭の中によみがえる、私の声。

翔ちゃん。

そんなの、嘘なんだよ。

私の本当の気持ちは、もう翔ちゃんから離れられないっていつのに。

でも、そんなこと、翔ちゃんが気付くはずも無くて。

昨晚お前が誘われてたところに、ほかの奴と行ってたんだよ

目眩が、しそうになる。

たかが幼馴染を、わざわざ心配して待つわけないじゃん

そんなこと、もう分かってたつもりなのに。

どうしよう。

すごく苦しいよ。

携帯を開く。

ディスプレイの中で、ムカツクくらい輝いているミニちゃんが、瞬きをしながらこっちを見つめている。

アドレスのボタンを押して、翔ちゃんのメールアドレスを引っ張り出してくる。

Eメール作成のところにカーソルを合わせて決定ボタンを押す。

なんて打とう。

言いたいことは沢山ある。

でもその大半が言っではいけないことで。

結局、今日はごめんね、とだけ入力してから送信した。

携帯を閉じながらため息を吐いて、ベッドの上に寝転がる。

電気の光が直に目に入る。

蛍光灯の光はきらい。

あまりにも白すぎて、すこし青いようにも感じられて、なんだか怖いから。

目を閉じても、わずかな光は瞼を通り越して私を突き刺してくる。

しばらくしてから「ご飯よ」とお母さんの呼ぶ声がして、電気を消して部屋を出た。

携帯は持っていない。

充電器に立てて、それはわずかな光を放っていた。

ご飯を食べている間、メールがきてるだろうかと気になって、やはり持って来ればよかったと少しだけ後悔して。

でもその晩、翔ちゃんからの返事は、とうとう返ってくることはなかった。

11・『奈緒』

11・『奈緒』

地球は別に、私を中心に回っているわけでは決してなくて。

だからもちろん、次の日はいつもと変わらず普通にやってきた。

学校に行くと、加奈と小百合が大丈夫だった？と心配そうに聞いてきたから、大丈夫と言って曖昧に笑った。

昨日の晩は、来ないメールをずっと待ってて、ほとんど寝ていない。

二人は相変わらず申し訳なさそうな顔をしていたけど、敢えてそれ以上はなにも言ってこなかった。

お昼休み、お茶を買いに中庭の自販機のところへ歩いていく途中、翔ちゃんに会った。

一瞬目が合ったけれど、何て言っているのかわからず思わず視線を

そらしてしまった。

はあ。

私の馬鹿。余計感じ悪くなるだけじゃん。

「自販行くんだろ？早くした方がいいぜ。かなり並んでる」

え？

ぱっと顔を上げる。

そこには、いつもと変わらない、おどけたような翔ちゃんの顔。

昨日のこと、もう許してくれたんだ。

なんだかすごくほっとした。

もう前みたいに喋れなくなっちゃうのかなとか、かなり怖かったから。

「え？そうなの？」



「バスケット部が休憩に入ったからな」

「そつか！じゃあ早くしなくちゃ売り切れちゃうかも」

「もうそろそろ他の部活も休憩に入るぞ」

「うわ、ほんとだ。ありがとう。じゃ、そろそろ行くね」

「  
」  
「おう」

軽く手を振って翔ちゃんの横を通り過ぎる。

「あ、そうだ、相模」

・・・あれ？

後ろを、振り返る。

「ん、どした？」

「今、相模って・・・？」

「あー呼んだけど。」

「え、な、んで？翔ちゃ」

「俺たちって、別に名前呼び合うような仲じゃないじゃん？」

「え、でも今までは」

「ほかの女の子と付き合ったりするとき、色々不便なんだよね。だからさ、相模もこれから俺のこと苗字で呼べよ」

なに、それ。

「昨日のこと、やっぱり怒ってるの？私は翔ちゃ」

「中村」

訂正され、ぐっと黙る。

もう、名前で呼び合うことすら、許されないの？

「じゃ、そういつことだから」

翔ちゃんは手をひらりと振ると、目もあわずに私の横を通り過ぎ  
て行った。

私は、そこを動くことができなくて。

お財布をただ握り締めていた。

「ミホってさ、また中村とヨリ戻したの？」

中村という名前に、思わず顔を上げる。

そこには、少し前に翔ちゃんと付き合っていたミホちゃんと、その  
友達がいて。

「んゝヨリ戻したってわけじゃないんだけどねえ。でも、名前で呼んで良いって言ってもらえたから、前よりちよつと進歩かもお」

え？

よく内容が分からない。

「そういえば、前中村と付き合ってたときは、絶対苗字でしか呼び合ってたなかったもんね。あれなんで？」

「なんかあ、『俺のこと名前で呼ぶのは、特別な奴だけだから』、とか言われちゃってえ。そのときはちよつとショックだったなあ」

ミホちゃんとその友達は、その後も楽しそうに喋りながら校舎内に戻っていった。

『俺のこと名前で呼ぶのは、特別な奴だけだから』

そんなこと、ひとつも言ってくれなかったじゃん。

そんなこと、全然知らなかったもん。

私って、翔ちゃんにとって『特別』だったの？

翔ちゃん。翔ちゃん。

もう私には、そう呼ぶ資格はないのだけれど。

翔ちゃん。翔ちゃん。

もう、ごめんねも伝えられないのね。

翔ちゃんにとって、私がどういう存在だったかは今もわからない。

でも、私と翔ちゃんは幼馴染で。

それは、ほんとは、とっても大切なことだったんだね。

好きだなんて、もういいの。

私だけを見てて欲しいなんて言わない。

だから、もしも願いが届くなら。

もう一度だけ、奈緒って呼んで。

12・モモちゃん

12・モモちゃん

シャカシャカシャカシャカ

今さっきの部活で使ったお鍋を洗う。

菊池くんが少し焦がしてしまつて。

なかなか落ちないじゃない。

「奈緒先輩！」

「わっ！」

背後からいきなり、にゅつと後輩のモモちゃんが現れて、びっくりして思わずスポンジを落としそうになる。

「どうしたんですか？そんなコワイ顔しちゃって」

「え？コワイ顔してた？私」

「はい。ものすゝく」

金井桃香。

モモちゃん。

一つ年下の料理部の後輩。

モモちゃんはいっつも明るくて。

そんなモモちゃんを見ると、少しだけ元気になる。

「先輩最近元気ないから・・・モモ心配だなあ」

「大丈夫だよ。何にもないから」

「悩みとかあったら、絶対モモに相談してくださいね！」

「はい。ありがとね、モモちゃん」

「いいえ！モモは奈緒先輩大好きですから！」



ああ、もう！モモちゃんは可愛いなあ！

「私も大好きよ、モモちゃん」

「ほんとですか？じゃあ、ちょっと先輩に頼みたいことがあるんですけど」

いきなり上目遣いになるモモちゃん。

調子がいいとはこういうことを言うのね。

「なあに？モモちゃん」

「奈緒先輩って、中村先輩と幼馴染ですよね？」

「え・・・」

中村。中村翔。翔ちゃん。

その名前を聞いて、思わず表情が曇る。

あれから、一度も翔ちゃんとは喋っていない。

たまに見掛けることはあっても、どうしても呼びかけることができなかった。

だから、今はあんまり翔ちゃんのことを思い出さないようにしているのに。

「そこで、コレ！中村先輩に渡して欲しいんです！」

モモちゃんは、ポケットから一枚の手紙を取り出して私に差し出した。

「これは・・・」

「いわゆるラブレターってやつです」

照れる様に笑うモモちゃんは、女の私からみてもすごく可愛くて。

だから尚更、複雑な気持ちになる。

「モモは実は、中村先輩に一目惚れしちゃいました!」

そう言うモモちゃんはひどく幸せそうで。

恋してますってかんで。

私も、翔ちゃんのが好きなんだよ。

だから、ごめんって。

そう言いたいのに。

言えない。

言えないよ。

断る理由なんて、私には無いんだから。

「私・・・」

「先輩？渡してくれないんですか？」

急に悲しそうな目で私を見てくる。

まるで子犬のように。

私が到底敵いっこないくらい、大きな可愛い瞳をしていて。

「・・・わかった。いつになるか、わからないけど・・・」

「わー！ありがと、先輩！やっぱり奈緒先輩って超優しい！」

言いながら、ギュッと抱きついてくるモモちゃん。

「中村先輩、OKしてくれるといいな」

モモちゃん、ごめんね。

やっぱり応援はできないけど。

でももしかしたら、翔ちゃんはモモちゃんを好きになって、二人が付き合うことになるかもしれない。

そしたら、その時はちゃんと、おめでとって言ってあげなきゃ。

それまでに、少し時間がかかるかもしれないけれど。

また、前みたいに『翔ちゃん』って呼べる日がきたら。

笑顔で、おめでとって。

13・菊池くん

13・菊池くん

はあ。

これで何回目のため息だろう。

モモちゃんから預かった手紙とにらめっこ。

今日も部活で学校に来ていて。

午後六時をまわった今、校内には、もうほとんど誰もいない。

あれから三日経ったけれど、手紙はまだ渡せていない。

いや、できればこのまま渡したくないんだけど。

最近、翔ちゃんを見かけない。

夏休みの補習にもほとんど顔を出していないらしくて。

どうしたんだろう、とか思ってしまった。

たとえ姿を見かけたとしても、前みたいに気軽に話しかけることなんてできないのに。

ヒグラシの声だけが、静かに響いている。

私もそろそろ帰ろっかなと、鞆に手紙を閉まったとき、ガラリと教室の扉が開いた。

「あれ、相模先輩まだいたんですか」

そこには、きよんとした顔で立っている菊池くん。

菊池忠義。

菊池くん。現在一年生の、これまた料理部の後輩。

「菊池くん」

「俺、今から帰るところで、たまたまこの教室の前通りかかったら先輩がいて。勉強ですか？」

菊池くんは、翔ちゃんと違って結構真面目だったりする。

「うっん、ちがうちがう。ちょっとね、忘れ物」

モモちゃんからラブレターを預かっているとは、やっぱり言わないほうがいい。

「もうこんな時間。早く帰んなくちゃ、すぐに暗くなっちゃうね」

言いながら、菊池くんの立っている扉の方へ歩いていくと、ぎゅっと腕を掴まれた。

少し驚いて、菊池くんの顔を見る。

「菊池、くん？」

「相模先輩。少しだけ、いいですか？」

夕焼けに染まる菊池くんの表情が、あまりにも真剣で。



なぜか喉が渴いたように、ごくろ、と音がした。

菊池くんは、後輩で。

モモちゃんと同様、私の可愛い後輩で。

ただ、それだけだったのに。

それでも、今はじめて、目線を合わせるには見上げるしかないってことに気がついて。

菊池くんは、私とはちがう、男の子なんだって。

だから、私の腕を掴む手は、こんなにも大きくて。

思わず、下を向いた。

「先輩」

「・・・なに？」

「先輩は、中村翔って人の恋人なんですか？」

モモちゃんも菊池くんも。

私と翔ちゃんって、周りにはそんな風に映っていたのかな。

でもこのことを聞いたら、きっと翔ちゃんは馬鹿にしたように笑うんだろうな。

「そんなわけ、ないじゃん。ただの、幼馴染だから」

「じゃあ」

私の腕を掴む力が、少しだけ強くなる。

「俺と付き合ってください」

ヒグラシの声だけが、ただ、響いていた。

「・・・」

ねえ、私はどうしたらいいの？

「相模先輩、ずっと好きでした」

このまま、菊池くんにすがりついてしまえたら、どんなに楽だろうと。

「・・・ありがとう」

翔ちゃんのことを忘れられたら、もう泣くことなんてないのにと。

「でも・・・ごめん」

もう、翔ちゃんのことを想い続けていても、その先には何も無いというのに。

「少し、考えさせてほしい」

そう思っても、それじゃあきつと幸せになれないなんて。

そんなふうに感じるのは、

ねえ、翔ちゃん。

どうして？

## 14・夕焼け

### 14・夕焼け

あの後菊池くんは、返事はそんなに急がなくていいからと言って、先に教室を出て行った。

半分空が暗くなった頃に、私も学校を出た。

門の扉は、半分はもう閉まっていて、たぶん私が最後の生徒なんだろうな、なんて思う。

だから、帰り道に翔ちゃんの背中を見つけたときは、かなりドキリとしてしまった。

肩から大きなスポーツバッグをかけて一人で歩いている翔ちゃんは、やっぱり私がずっと好きだった翔ちゃんで。

薄暗い夕焼けに、白いカッターシャツも少しだけ溶けてしまっているようだった。

ねえ。

この光景は、少し前と何も変わらないのに。

もう、翔ちゃんと呼んでも、振り向いてはくれないんですよ。

鞆の端に入れてあった、モモちゃんからの手紙を取り出す。

渡さなきゃ。

モモちゃんからのラブレター。

渡したくない。

でも、

渡さなきゃいけない。

翔ちゃんのそばにいたいから。

絶対にこの気持ちを知られちゃいけない。

「中村くん！」

タイミングなんて考えないで、ただ足をふんばって呼んだ。

違和感なく聞こえる、その自然な呼び名が、なんだかものすごく寂しかった。

「あ、相模。よう」

「ごめんね、呼び止めちゃって」

「いや、俺も丁度相模に言いたいことあったし」

「私も。私も中村くんと言わなきゃいけないことあるの」

背中後ろで、少しだけ手紙を握り締める。

「そうなの？じゃあ相模先に言えよ」

「え、いいよ。中村くん先にどうぞ」

「いいから言えって」

優しく笑う翔ちゃん。

やっぱり好きだな。私。

翔ちゃんのこと、好きだよ。

「・・・じゃあ、これ」

モモちゃんからの手紙を突き出す。

一瞬、翔ちゃんの眉間にしわが寄った。

「なに、これ」

「後輩の、金井桃香って子から。・・・渡してって頼まれたの」

「・・・」

翔ちゃんは、何も言わなかった。



少しの間、沈黙が訪れる。

ねえ、こんなの受け取れないって言って。

ラブレターなんて読む気ないって、そう言ってよ。

「・・・わかった。わざわざサンキューな」

そう言つて、翔ちゃんはモモちゃんからの手紙を受け取り、そつとポケットの中にしまった。

それはまるで幻のようで。

夢の一片のように、私にはどうしても信じることのできない光景だった。

「それだけ？じゃあ、俺帰るわ」

くると私に背を向ける翔ちゃん。

「しょ、中村くんの言いたいことって？！まだ聞いてないよ！」

でも翔ちゃんは、私の声に振り返ることなく、

「何言っか忘れちった」

そう言って、あの日のように手をひらりと振って、ゆっくりと、佇んだままの私から離れていった。

小さくなっていく翔ちゃんの背中が、ぼやりとオレンジ色にかすんでいく。

あーあ。渡しちゃった。

もう、何やってるんだろ、私。

さっさと翔ちゃんなんて諦めればいいじゃん。

翔ちゃんじゃなくなたって、菊池くんは、ちゃんと私のことを見ていてくれる。

そうすれば、こんなに苦しむこともないのに。

でもね、こんなにも涙が止まらないのは。

やっぱり、それが翔ちゃんだからなんだって。

「好きだよ。翔ちゃん」

ずっと先の、もうほとんど見えないその小さな後姿に、私はぽつりと呟いた。

## 15・幼馴染

### 15・幼馴染

色々な手続きがあつて、その日は学校に来ていた。

だから、A組の教室の前を通つたときに奈緒の声が聞こえてきて、思わず立ち止まってしまった。

午後六時を過ぎた校内には、もうほとんど誰もいないというのに。

その教室の中には、奈緒と、前に見たことのある菊池とかいう一年。

窓から射し込む重いほどの夕焼けが、どうしてもその二つの影を鮮明にしていた。

だから、奈緒とそいつが、ただの先輩後輩の会話をしているんじゃないって。

その艶やかな空間は、そんなくだらない話をしているんじゃないって。

もう、菊池が奈緒に気があることくらい、ずっと前に気付いていたのに。

盗み聞きは、良くない。

でも、聞かずにはいらなかった。

「菊池、くん？」

「相模先輩。少しだけ、いいですか？」

菊池の、奈緒の腕を掴む手が、やけに目につく。

奈緒に、触れるなよ。

「先輩」

「・・・なに？」

一瞬、菊池と目が合ったような気がした。

ガラス一枚を挟んだ、その短い距離で。

「先輩は、中村翔って人の恋人なんですか？」

挑むようなそいつの目に、今はどうしても勝てるような気がしなかった。

この先は、聞きたくないと思った。

でも奈緒は、さらりと言ってしまっただよな。

「そんなわけ、ないじゃん。ただの、幼馴染だから」

わかってた。わかってたんだけどさ。

やっぱり、かなりキツイよ。

「じゃあ」

なあ、奈緒。

「俺と付き合ってください」

なんで俺とお前は幼馴染なんだろうな。

ヒグラシの声だけが、ただ、響いていた。

奈緒がどう答えるかなんて、知りたくなかったから。

俺は、そのあと走って学校から出た。

それはまるで逃げるようだったかもしれないと。

あとになって、かつこわるいなんて思ってみたり。

そのあと、道端で奈緒に呼び止められて、何も知りませんよって風に振舞った。

うまくいったかどうかは、わからないけど。

そのときに、後輩から預かったとかいう手紙を渡されて。

これが、奈緒の気持ちの全てを物語っているようで。

正直、ものすごくイライラした。

ほんとは、その日のうちに言っておきたいことがあったけど。

でも、なんだかもいいやって。

変な同情はしてほしくなかったし。

「しょ、中村さんの言いたいことって?!まだ聞いてないよ!」

「何言っか忘れちった」

ごまかすのなんて簡単。

言葉も。

俺自身の気持ちでさえも。

俺と奈緒はただの幼馴染で。

そう自分自身に言い聞かせたところで、この想いがどうにかなるわ



けじゃないってわかっているのに。

俺は幼馴染だから、この気持ちを諦めなきゃいけない。

なあ、奈緒。

なんで俺とお前は、幼馴染なんだろうな。

## 16・忘れ物

### 16・忘れ物

その日の晩は、なんだかよく眠れなくて。

朝起きて鏡の前に立つと、なんとも言えないような、疲れた顔をしていた。

「ぶっさいくな顔」

顔をばしゃりと洗って、朝食を食べる。

食欲なんて無かったけど。

むりやりトーストを口に押し込んだ。

「奈緒ちゃん、今日学校休みでしょ？」

洗濯物かごを抱きかかえてダイニングに入ってきた母が聞いてきた。

「え」

今日は土曜日で、何故か料理部は土日は部活をしないという決まりがあるらしく、学校に行く予定はなかった。

「うん、そうだけど」

たぶん、何か頼まれるな。

「じゃあ悪いんだけど、お父さんの会社まで、そこに置いてある封筒持って行ってあげてくれないかしら」

ほら来た。

お母さんが顎で示した小さな戸棚の上に、ちょこんと茶封筒が置いてあった。

大きさからして、たぶん何かの書類だろう。

「なに。お父さん忘れ物したの？」

「そうなのよ。さっき電話があつてね。奈緒ちゃん、お願い」

私とお母さんは仲が良くて。

だから尚更断れない。

「わかった」

ほんとは外になんて出たくなかったけど。

ジーンズとＴシャツに着替えて、封筒を片手に家を出た。

近くの商店街を通り過ぎ、喫茶店などが集まった駅前道に出る。

夏で。

日差しがものすごく強かった。

だから、少し前を歩いているカップルが、翔ちゃんとモモちゃんだって。

そう気付くのに、少しだけ時間がかかった。

昨日、あの手紙の返事を、翔ちゃんはモモちゃんに返したんだ。

昨日のうちに。

私は、まだ菊池くんに返事をしていないけれど。

その答えがどうだったのかなんて、正直知りたくなかった。

知りたくなんて、なかったのに。

目の前を歩く二人の姿が。

翔ちゃんの腕に絡みつく、細く白いモモちゃんの腕が。

そして、とてもお似合いのその後姿が。

全てを私に物語っていた。

くるりと回れ右をして、会社までの行き方を変える。

あの二人に、会いたくなかった。

二人とも、きっと幸せそうな顔をしてるから。

おめでとうって言うって決めたけど。

やっぱりまだ、そんなに強くないよ。

まるで子供のように泣きながら、私は歩き続けて。

通り過ぎていく人たちが、不思議そうに私を見ていく。

でも、溢れる涙は止まらなくて。

心の奥がぎゅって痛くなる度に、またぼろぼろと頬を伝う。

翔ちゃん。

モモちゃんも、そう呼んでいるのかな。

そう思うと、もっともっと、心の奥が痛くなって。

中村くん

昨日の私の声がよみがえる。

もう、どうすることもできないのに。

私はまだ、こんなにも翔ちゃんのことを好きだなんて。

## 17・ワンピース

### 17・ワンピース

金井が見たいと言った映画が終わり、外に出る。

入った時はまだ明るかったのに、もう大分外は暗くなっていた。

おもしろかったと、金井はとても喜んでくれて。

素直に良い子だと思った。

昨日、あれから帰って手紙を見ると、まあお決まりの言葉と、メールアドレスが書かれていた。

無視するのもなんだし、適当にメールして、今日遊ぼうということになったのだ。

どうせあと少しの間だけなんだし。

「先輩、この後どこ行きます?」



言いながら、金井が腕を絡めてくる。

「もうそろそろ七時だけど、大丈夫？」

「はい！何時までもOKでえす」

「じゃあ、ご飯食べに行こっか。近くに友達バイトしてるイタリアンレストランあるから。パスタとか嫌いじゃない？」

「大好きです！」

嬉しそうに笑う金井。

ふわりと揺れる柔らかい髪と、睫毛の長い大きな目。

たぶん彼女は、他の男から羨まれるくらい可愛いと思う。

だから俺も。

今日くらい全て忘れて、楽しもうと決めてたのに。

この想いも。

菊池のことも。

そう思ってこうやってデートしに来たのに。

目を閉じると、腕に絡まるその温もりは、やはり奈緒のもので。

嬉しそうに笑う奈緒が、隣を歩いているような。

金井の着ている白いワンピースは、奈緒が着るときとすごく似合  
うんだろっかなんて。

朝から、そんなことばかり。

今、奈緒は何してるだろうか。

菊池への返事は、一体どうしたんだろう。

そんなことを考えても、どうしようもないというのに。

頭の中は、昨日のことではいっばいで。

かすかに、苛立ちを覚えて。

たぶんこれが、嫉妬というやつなのだろう。

そんな自分に、ため息が出る。

「先輩？どうしたんですか？」

聞かれて我に返る。

「ん。なんでもない」

曖昧に笑顔を作ると、金井もつられたように優しく微笑んだ。

周りを見ると、もうカップルばかりだった。

「中村先輩」

「ん？」

「昨日先輩がメールくれたとき、かなりびっくりしました」

「そう？」

「はい。でも、すごく嬉しかったです」

金井の方を見ると、恥ずかしそうに下を向いていた。

「先輩」

金井が、さらに体をくっつけてくる。

「私、ずっと先輩のこと好きだったんですよ」

「昨日の手紙に書いてくれてたじゃん」

「直接言いたくなっただんです」

「そっか」

「はい」

だんだんと歩くスピードが遅くなり、やがてぴたりと止まった。

「どした？」

「先輩」

ゆっくりと、金井が顔を上げる。

その頬は、かすかに紅く染まっているようで。

「本気なんです。中村先輩のこと」

「・・・」

「友達からでいい。だから」

絡まっていた腕は、いつのまにか離れていて。

「中村先輩・・・好き・・・どうしようもないくらい」

そう言う金井の声が、あまりにも切なげで。

何も答えず、向かい合う。

その小さな顎に手を掛け、くい、と持ち上げた。

金井の瞼が、自然と降りる。

俺も目を閉じて、そっと顔を近づけた。

翔ちゃん

ぱっと顔を離す。

驚いたような金井の顔。

頭の中でふいに響いた奈緒の声。

「ごめん・・・金井」

「え？」

ああ。こんなことなら、来なきゃよかった。

「お前じゃ、駄目だ」

「先輩？」

「俺」

いつか保健室で泣いた時の奈緒の顔が、頭に浮かんだ。

「奈緒のことが、好きなんだ」

自分の想いを、痛感しただけじゃねえか。





## 18・さよなら

18・さよなら

月曜日、また部活があつて。

でもその日は、モモちゃんに来ていなかった。

菊池くんと顔を合わすのが少し怖かったけれど、菊池くんはいつもと同じようにに接してくれて、少し安心した。

菊池君に、返事はまだしていない。

正直、土曜日の翔ちゃんたちのことが気になって、このことを考えることができなかった。

もしかすると、それ自体が答えなのかもしれないけれど。

でも、まだ菊池くんに伝えることはできていなかった。

「あ」

ジャガイモをぐしぐしと洗って、手を拭こうとしたときに気がつく。

お手拭、教室に忘れた。

「ん、どしたの？」

隣でジャガイモの皮を向いていた友達が首をかしげる。

「お手拭、教室に忘れてきちゃった」

いいながらジャガイモをおけの中に戻す。

「あ、じゃあ私の使っ？」

「いい、いい。この後も結構使っだろうし。ちょっと取りに行ってくる」

部長に断って、調理室が出る。

もうすぐ七月も終わりで、校内にはほとんど誰もいなくて。

私の廊下を歩く足音だけが、ぱたぱたと響く。

二階に上がって廊下を真っ直ぐ進む。

教室の前まで来て、ドアを開けようとしたとき、中に誰がいることに気がついた。

でもあまり気にせずに、がらりとドアを引く。

そして、窓際に軽くもたれて立っているその人が誰なのかわかった時、私は思わず足を止めた。

「中村・・・くん」

真昼間の白い光を背中に浴びて、翔ちゃんは優しく笑っていた。

「よし」

「どう、したの？誰か待ってるの？」

「うん」

翔ちゃんの目が、きゅっと細くなる。

「相模、待ってた」

優しいその笑顔は、あまりにも整っていて。

いつもの翔ちゃんじゃなくて。

「え・・・」

なんだか少し、怖かった。

足が、動かない。

翔ちゃんが、表情を崩さずにゆっくりと近づいてきて。

私の後ろのドアを、静かに閉めた。

「・・・中村くん？」

「相模、」

いきなり、腕をぎゅっと掴まれる。

まるで、菊池くんがしたときのように。

全く同じ場所で。

同じことを。

「菊池に告白されただろ」

そのときの翔ちゃんは、もう、笑っていなくて。

「こっやって腕掴まれてさ」

私の腕を掴む手に、力が入る。

「いた・・・！」

振りほどこうとするけど、全く離れない。

「相模、菊池のこと好きなの？」

その言葉に、またぎゅっと胸が痛くなる。

「そんなこと・・・！」

無いつて言おうとしたけれど、そのときの翔ちゃんの表情があまりにも陰しくて。

その言葉はのどに引っかかって、出てきてはくれなかった。

「ねえ、相模」

翔ちゃんが顔をすっと近づけてきて、

「最後にお願ひがあるんだけど」

私の耳元で囁く。

「ヤラセろよ」

その言葉が聞こえた瞬間に、どん、と床に押し倒される。

「え、なに?!」

状況が飲み込めない。

今翔ちゃん、なんて？

ヤラセろよ

頭の中に、響く、翔ちゃんの低い声。

「え、いやだ!やめてよ、はなして!」

上に被さる翔ちゃんを押し返そうとしても、ビクともしない。

「中村くんにはモモちゃんがいるじゃない！」

「あんなの、ただの遊びに決まってるだろ」

その声はあまりにも冷たくて。

「やだやだ！中村くん！」

ぷっん。

ボタンが一つ外される。

「やめて！いやだよ！」

ぷっん。

怖い、怖いよ。

もちろん、その行為自体も。

だけど、私には分かってたから。



「中村くん！やめて！」

ぷつん。

この行為が終ってしまったら、もう本当に、前の楽しかったあの時には、戻ることができなくなるって。

私には、わかってたから。

ねえ、いやだよ。

そんなの嫌だよ。

翔ちゃん。

「翔ちゃん・・・！」

その声に、びくりと翔ちゃんの手が止まる。

「お願い・・・怖いので、翔ちゃん。お願い・・・」

もう涙でぐしゃぐしゃな私の顔を見て、苦しそうに眉間にしわをよせる。

「ごめん・・・もう、しないから」

言いながら、さっき外したボタンを留め直していく。

「だから、もう泣くなよ」

優しく私の涙を指で拭う翔ちゃん。

私が少し落ち着くと、ずっと翔ちゃんは立ち上がった。

ゆっくりと歩いて行って、ドアの手前で立ち止まる。

「俺さ、父さんの仕事の関係で、明日神戸に引っ越すんだ」

え？

今、なんて？

ゆっくりと上半身を起こす。

翔ちゃんは外を向いたままで、顔が見えなかった。

「どういう、こと？私、何も知らな」

「お前のおばさんやおじさんに、お前には知らさないでほしいって、お願いしておいたから」

「そんなの！」

「明日俺があのレストランから出て行くまで、俺の前に現れないでほしい」

「え・・・？」

「見送りも、しなくていいから」

「何言って」

「お前の顔なんか、もう見たくないんだ」

翔ちゃん。

「さよならだよ、俺たち」

一瞬振り返った翔ちゃんの顔が、なんだかものすごく苦しそうで。

廊下を走っていく翔ちゃんの足音だけが、ただ響いていて。

追いかけることなんて、できなかった。

「相模先輩？」

「菊池くん……」

まるで入れ替わるようにして入ってきた菊池くんが、私の涙のあと

に気がついて、慌てて走り寄ってきた。

「戻ってくるのがあまりにも遅かったから、少し心配になって。どうしたんですか？何かあったんですか？」

そう言って、優しく私の肩を支えてくれる。

でもね、ごめん。

ゆっくりと、菊池くんを押し返す。

「菊池くん……ごめんね……。私、やっぱり菊池くんの気持ちに心えられない」

菊池くんがかすかに息を吸うのがわかった。

「私、翔ちゃんが好きなの」

私にはもう、何も恐れるものなんて無いじゃない。

だって、翔ちゃん。

もう私たちは、元には戻れないんだから。

## 19・二人

19・二人

部屋の中の荷物が全て運び出され、トラックの荷台の中に詰め込まれていく。

タンスやらベッドやらで、作業は結構大変そうだったけれど。

なんとか無事に終ったらしい。

最後に小さめの本棚が詰め込まれ、バンと大きな音をたてて荷台の扉が閉められた。

「ありがとうございました」

父さんと母さんが引越し業者の人に頭を下げる。

業者の人たちはそれに笑顔で応えた後、トラックに乗り込みゆつくりと出発ていった。

目の前には父さんの白いセダンだけが残り、いきなり開放的に広くなる。

「さ、僕らも出発しようか」

言いながら父さんと母さんが車のドアを開けた。

マンションを見上げる。

生まれてから、今までずっと住んできたマンション。

視線の先には、奈緒の住んでいる部屋。

太陽の光が眩しくて、少しだけ霞んで見えるけれど。

その下の階に、俺の住んでいた部屋がある。

ここから見れば、本当に近い場所に俺と奈緒は住んでいたんだなあと思う。

ぽん。



何か足にぶつかったような気がして下を見ると、小さな赤いボールが転がっていて。

拾い上げるのと同時に、二人の小さな男の子と女の子が駆け寄ってきた。

「お兄ちゃん、ボール」

かえして、とでも言うように手をすつと伸ばしてくる男の子。

「車には気をつけろよ」

そう言ってボールを渡してやる。

「ありがとう」

今度は女の子が可愛い笑顔でお礼を言うと、二人はぱたぱたとどこかへ走っていった。

その小さな背中を眺めていると、とても懐かしい気がした。

俺と奈緒は、本当にあれくらい小さな時から一緒で。

奈緒は泣き虫で。

そのくせドジで。

道端で転んでは、よく泣いていたっけ。

手を差し伸べてやると、ありがとう、と安心したように笑って。

そのときの笑顔が。

あの、幼いころの思い出が。

今でもしっかりと、色あせることなく俺の中にある。

ずっと、幸せだった。

奈緒と笑って、普通に過ぎていく日々が。

でも、いつからなのか。

気付いたときには、この気持ちはもう、止めることができないくらいまで大きくなっていて。

奈緒を泣かせることになる。

そんなことは分かってたんだ。

だから絶対に知られちゃいけないって。

俺と奈緒は『幼馴染』という、最もなバランスを保っていたのに。

ごめんな、奈緒。

それを崩してしまったのは、たぶん俺なんだよな。

ゆっくりとマンションから車へ向きを変える。

中で申し訳なさそうな父さんと母さんの顔が見えて、困ったように笑った。

本当は、神戸なんかに行きたくない。

こんな形で、奈緒と離れなくちゃいけないなんて。

そんなの、本当はすごく嫌なんだ。

離れたくなんかない。

奈緒と、さよならしたくないんだよ。

でも、それは無理なことだから。

俺だけがここに残ることなんて、できないから。

後部座席のドアを開ける。

中からクーラーの冷気が流れ出る。

なあ、奈緒。

たぶんこれから先、俺たちは恋をする。

それはまだ知らない人とかもしれないし、もしかするともう知っている人とかもしれない。

でもきっと、お前以上に好きになれる人は、もういないよ。

「翔ちゃん！」

声がして、振り返る。

奈緒が、マンションの階段を降りて、俺の方へと走ってきていた。

これは伝えられなかったことだけど。

奈緒。

君は俺にとって、誰よりも大切な女の子だったんだ。

## 最終話・翔ちゃん

最終話・翔ちゃん

大きなトラックが数台、下にとまっていて。

最後の荷物を積み終えて、それらが走り出すのを窓から見とどける。

そのあと急いで靴を履き、外の廊下へと飛び出した。

真夏の昼だった。

私は勢い良く階段を駆け下りる。

突然の転勤だったと、お母さんが教えてくれた。

私が昨日はじめて知ったことにひどく驚いていたようで。

翔ちゃんからは、自分で伝えたいから私には言わないで欲しいと頼

まれていたらしい。

金曜日の夕方、翔ちゃんはきつとこのことを言おうとしてたんだ。

何言うか忘れちった

夕焼けに染まった、あのオレンジ色の背中が頭の中をよぎる。

ごめんね、翔ちゃん。

私、何も知らなかったよ。

何度が階段から滑り落ちそうになりながらも、なんとか下まで着くと、翔ちゃんが車に乗り込もうとしているのが目に入った。

「翔ちゃん！」

その声が聞こえたようで、翔ちゃんがこちらを振り返る。

思い切り地面を蹴って走った。



髪が乱れたって、そんなことどうでもいい。

待って。

まだ行かないで。

少しだけでいいから。

もう顔も見たくないと言われたけれど。

それでも。

最後に、お願い。

全てを、聞いて欲しいの。

「相模・・・」

翔ちゃんの前まで走っていくと、翔ちゃんは少し驚いたような顔をしていた。

「翔ちゃん、ごめ、ん。来るなって、言われたのに」

ゆっくりと息を整える。

その間に翔ちゃんは、ぶいと後ろを向いてしまった。

「翔ちゃん、私ね菊池くんに告白されたの」

「・・・」

「好きだって、付き合ってほしいって言われた」

顔が見えなくて、どんな表情をしているのかわからない。

「私、もう菊池くんと付き合っちゃおうかって、何度もそう思った」

その言葉に、翔ちゃんがぴくりと反応する。

「でもね、できなかった」

ぎゅっと、こぶしを握る。

「私、翔ちゃんのことを好きなの」

ずっと閉まっていた気持ちは、口にするとひどくあっさりとしていて。

さらりと、風が攫って行ってしまうそうなくらいに。

「・・・なんで」

「・・・?」

「・・・なんで今、そんなこと言うんだよ」

言葉が、出なかった。

ごめんって言わなきゃ。

頭ではわかっているのに。

翔ちゃんからのその否定の言葉は、もつずっと前から目に見えていたことじゃない。

だから、大丈夫。

今は、泣いちゃだめ。

泣いちゃだめよ、奈緒。

「土曜、金井と遊んだ」

「・・・え？」

いきなりそのことを話し出した翔ちゃんに、なんて返せばいいかわからなかった。

「他の女とも、今まで数え切れないくらい遊んできた」

「・・・」

「そのときに考えるのは、いつも、忘れなくちゃいけないって」

翔ちゃん？

「でも、無理だった。忘れることなんてできなかった」

何を、言っているの？

「金井のときも、他の女のときも」

よく、わからないよ。

ゆつくりと、翔ちゃんがこちらへ振り返った。

「頭に思い浮かぶのは、奈緒、お前のことばかりだったよ」

翔ちゃん。

それは、どついう意味なの？

翔ちゃん。

私、まだうまく理解できない。

でも。

久しぶりに聞いた、翔ちゃんの『奈緒』と呼ぶ声が、あまりにも優しく。

泣いちゃだめって、そう決めてたのに。

歩いてきて、翔ちゃんが私の前に立つ。

向かい合う、私と翔ちゃん。

「翔ちゃん」

「ん？」

「私は、翔ちゃんのこと、好きでいてもいいの？」

翔ちゃんは静かに微笑んで、優しく私の頬に手をあてた。

「奈緒」

翔ちゃん。

「俺は、ずっと奈緒のことが好きだった」

ねえ、好きだよ。

誰よりも、何よりも、あなたが好き。

ずっと伝えられなかった気持ち。

溢れる涙は止まらないけれど。

でも、私は今、こんなにも幸せなの。

「一人前になって、しっかりした大人になったら、必ず迎えに来るから」

「うん」

「だからその時まで待ってて欲しい」

「うん・・・！」

待ってるよ。

ずっとずっと、待ってるから。

その後翔ちゃんは、指きりの代わりに、キスを一つ私にくれた。

走り出した白いセダンは、徐々にスピードを増していった。

到底追いつけないのに。

私は見えなくなるまで走り続けた。

後ろの窓から身を乗り出して手を振る翔ちゃんは、もしかしたら少



しだけ泣いていたのかもしれない。

でも、これは『さよなら』じゃないから。

だからきつと、私たちなら平気だよ。

ねえ、翔ちゃん。

私たちはまだ子供で。

よく分からないことの方がずっと多くて。

私と翔ちゃんが一緒にいた時間は、これから生きていく長い人生の中、ほんの一欠片だったのかもしれない。

でも。

それでも。

幼さの残る私たちが、不器用で、悩んだり泣いたりしながらも、や

っぱり好きだって思ったこの気持ちは、この気持ちだけは、きっと本物だったから。

私は信じてる。

私たちは、これからもっともっと幸せになるって。

だから。

ね、翔ちゃん。

おわり

## 最終話・翔ちゃん（後書き）

どうも、木村よしです

『翔ちゃんによろしく』を最後まで読んでくださって、本当にありがとうございます！

続けるっていうことが苦手な私ですが、最後まで連載できたのは、本当に読んでくださった皆様のおかげです。  
ありがとうございます！

よしはこれからも小説を書いていきたいなっています。  
なのでこの作品に対して、感想や批評や駄目だしなど、一言でも二言でも、もう厳しすぎるお言葉でも、もうなんでもいいので書き込んで頂けると、これからのよしの励みになり、力になります。

なので書き込んで下さい笑。

この作品を読んでくださった方々にとって、奈緒と翔ちゃんが少しでも親しみのもてる子になってくれたなら、それ以上に幸せなことはありません。

『翔ちゃんによろしく』を読んでくださって、本当にありがとうございます！

これからも、木村よしと、そして『翔ちゃんによろしく』を、どうぞ暖かく見守ってやってください・・・ 三

木村よし。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3828d/>

---

翔ちゃんによろしく

2010年10月29日23時55分発行